

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284050

研究課題名(和文)近世大名榊原家の文芸の総合的研究

研究課題名(英文)A studies of literature of Sakakibara-ke,the early modern Daimyo family.

研究代表者

廣木 一人(HIROKI, Kazuhito)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：30228829

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：上越市立総合博物館に寄託されている「榊原家史料」の内の3代、榊原忠次の「浄晃院様御詠草」、4代、榊原政房の『政房公御詠草』、6代、榊原政邦の『榊葉和歌集』『千流一滴集』を調査・翻刻・研究。また、榊原家と周辺大名、林家、僧侶、連歌師、俳諧師などとの文芸交流の研究を行った。分野としては和歌・漢詩・和漢聯句・連歌・俳諧である。

これによって近世初期大名の文芸活動が大名の江戸下屋敷を中心として豊かに行われていた様相の一端を明らかにすることができた。それらの成果は『榊原家の文芸 忠次・政房・政邦』(私家版)として刊行し、一般に公開した。

研究成果の概要(英文)：An investigation, a reprint, studies of literature, Waka, Renga, Kanshi, Wakanrengu, Haikai- on three generations of the Sakakibara family -3s Tadatsugu Sakakibara, 4s Masafusa Sakakibara, 6s Masakuni Sakakibara in "Sakakibara housue historical records" of Joetsu Municipal Museum. Tadatsugu's literary work was "Jokoinsama- Goeiso", Masafusa's literary work was "Masakuniko-Goeiso", Masakuni's literary work was "Sakakiba-Wakashu" and "Senryutteki-shu". Also, a study on literary exchanges between the Sakakibara family and neighboring Daimyo, Prest, Hayasi-ke, Renga-shi, haikai-shi etc. This made it possible to clarify a part of literary activities of the early modern Daimyo family. We Published results as "Sakakibara family literary Tadatsugu, Masahusa, Masakuni" (private edition).

研究分野：中世・近世和歌、連歌

キーワード：近世文学 和歌 連歌 俳諧

1. 研究開始当初の背景

(1) 榊原家は文芸愛好の近世大名として知られている家である。この文芸愛好ということについては、方向が二つある。一は享受の面、一は創作の面である。享受ということの具体的な現象としては、書籍蒐集という形で表れ、創作は創作物として残される。榊原家はその両者が揃っているということで、典型的な文芸愛好の姿を示している。さらに、その文芸が一家の内に留まらず、当時の文芸圏の中での豊かな交流を伴って行われていたことも注目すべきことである。これらの点で、榊原家の文芸を調査、考察することは近世大名を中心とする文芸のあり方を明らかにするのに格好なものと言える。

(2) 近世大名家に残された史料は江戸幕府解体後、その保存母体を失い、多くが散佚していったが、榊原家については、古典文学資料類は他に流失したものの、藩政史料は高田藩のあった上越市に、文芸資料中の創作資料の多くは東京に移住した榊原当家に保存され残された。ただし、史料管理の困難のために、長く、徳川黎明会(歴史文書関係は林政史研究会、文芸資料は徳川美術館)に寄託されていた。

このような経緯の後、平成一六年(二〇〇四)、この資料群は上越市(旧高田市)に設立された旧高田藩藩土の子孫による旧高田藩和親会に移され、「榊原家史料」として上越市立総合博物館に保管されることになる。これを機会に『高田藩 榊原家史料目録・研究』が平成二一年(二〇〇九)三月に刊行され、「榊原家史料」の基礎データが整うことになった。

われわれの研究はこのような経緯の中で、主として文芸創作資料のさらなる研究の深化のために計画されたものである。

2. 研究の目的

(1) 近世大名の中でも文芸愛好者として知られていた榊原家の文芸の総合的把握を目的とした。文芸のあり方は大きく享受面と創作面の二つに分けられるが、享受面として重要な古典蒐集のことについては、その多くが散佚し、榊原当家および高田藩のあった上越市に残されていないこともあり、われわれの研究は創作面を主とすることとした。

榊原歴代の中で特に重要であるのは、三代、忠次、四代、政房、六代、政邦(勝乗)であり、これらの当主には私家集も残されている。また、忠次を中心とした文芸の実際を示す詠草も保管されている。これらの調査、翻刻、研究をすることにより、その実態を明らかにすることを目的の第一とした。

(2) 近世大名家の文芸創作活動はそれぞれの領地で、藩の関係者だけで行われていたも

のではない。参勤交代のあったことも鑑みれば、藩主はその生涯の半分を江戸で過ごしていたのであり、榊原家言えば、忠次は江戸幕府の最重要な幕僚としてほぼ江戸に常住していた。そうであれば、近世大名の文芸活動は大半が江戸でのものということになる。江戸には榊原家と同様の理由で他の大名もいた。そこでの同僚としての交友も深かったと思われる。また、林家を中心とする漢学者や文芸愛好の僧侶、さらには柳營連歌師なども集住していた。

つまり、近世大名の文芸を探究することは江戸での上級階層の文芸のあり方を明らかにすることに通ずる。これが本研究を「近世大名の」「総合的」と名づけた理由である。

3. 研究の方法

(1) 榊原家の文芸の総体を把握するために、その資料を保管している上越市総合博物館、上越市立高田図書館、榊神社に赴き、それぞれの管理の実務の当たっている学芸員および榊神社の支援団体である旧高田藩和親会の幹事の方々の案内を得て、調査した。

その過程で、高田図書館には主として藩政史料、その中でも大部の「藩政日記」が保管されているもののそのほとんどが虫損などで、現段階では調査に堪えないことが判明。榊神社にはあるのは調度類が主であることも分かった。その結果、文芸資料がもっともよく保管されている上越市立総合博物館の調査を主とすることにした。

(2) 上越市立総合博物館の資料は「榊原家史料」と名づけられて、『高田藩 榊原家史料目録・研究』としてその総体の目録が作られている。これは充実した内容であるものの歴史研究者の手によるもので、文芸資料については誤りもあり、目録という性格から詳しい内容の記述もない。そこで、これらの中から、文芸に関係する資料を洗い出し、ほぼすべてを点検することから始めた。その際に重要なものの書誌調査、写真撮影も行った。

(3) 上越市立総合博物館保管の資料中で、特に重要だと思われる。「浄晃院様御詠草」『一掬集』『政房公御詠草』『榊葉和歌集』『千流一滴集』『嶺松院様集』を中心に再度、調査、写真撮影を行い、そのすべてを翻刻を目指した。

(4) 上記の調査、翻刻を踏まえて、その内容、また、忠次、政房、政邦の文芸のあり方を研究、近世大名の典型的な一例として、翻刻とともに公表することとした。

4. 研究成果

(1) 「浄晃院様御詠草」『一掬集』『政房公御詠草』『榊葉和歌集』『千流一滴集』『嶺松院様集』の調査、翻刻、研究。

「浄晃院様御詠草」は巻紙状、短冊を束ねたものを一括して箱に収め、名づけられたものである。この名称は、忠次の法号「浄晃院天誉長山」によるが、忠次関係のものだけでなく、政房、政邦のものも含まれ、また、かれらと同座した家臣また林家、連歌師の作品も記録されている。ほとんどが和歌会、詩歌会、連歌会での詠草類ということであり、これにより榊原家と他家との交流関係もある程度判明する。かれらの創作活動の生きた資料として重要である。

『一掬集』四冊は「浄晃院様御詠草」の箱に収められている忠次の私家集。詞書により交流関係などが判明する。この内の第四冊目は「半歌集」と名づけられた連歌発句集である。日次家集でこの点でも忠次の創作活動を明らかにできる。

『政房公御詠草』上下は政房の私家集。これにも詞書が多く、その創作の実態が判明する。中でも参勤交代による当時の領地姫路から江戸への道中の詠草など紀行としての面もあり、大名の参勤交代の実態の一面を見せている。当時の歌道家であった公家の点の付されたものもあり、これも大名家の文芸のあり方の一面として貴重である。日次家集でこの点でも創作活動解明のために重要。

『榊葉和歌集』一冊は政邦の私家集。部立されたもので、元禄五年（一七〇二）の成立、政邦の村上藩主時代、二七歳の時のものである。

『千流一滴集』二一冊は政邦の私家集。最晩年まで生涯にわたる詠歌を蒐集したものである。ただし、『榊葉和歌集』所収歌はほとんど収録されていない。

ほぼ、年代ごとに冊が分けられているが、幾分乱れているものもあり、この成立が時々、幾分過去のものであっても手許にあった詠歌を集めたものであったらしいことを推測させる。膨大なもので政邦の詠歌活動の活発さを感じさせるのに十分なもので、詞書も含め、今後時間をかけて研究をする必要のあるものと言える。

『嶺松院様集』は仮称。政房の女による五十首和歌。四季・恋・雑に分け、歌題に分類したものである。大名家の文芸が女性にも及んでいたことを示し、貴重である。

(2) 近世大名家の文芸資料の伝来の研究。江戸幕府解体後、全国の大名家はその資料の保管維持に苦心したことは、推測にかたくないが、榊原家においても同様な困難に直面した。調度類についてはここでの言及を避け、文芸資料に関してだけ述べれば、その資料は大きく古典籍と創作資料に分けることができるが、古典籍はそのほとんどが家から流失したと考えられる。現在、榊原家（上越市立総合博物館保管）のもので重要なものは「榊原家本私家集」として残されているものくらいである。流出先として特筆すべきは大倉精神文化研究所で、ここには文書類を含め、四

千冊にのぼる榊原家旧蔵本があるとされている。

したがって、現在上越市立総合博物館に保管されている文芸資料はそのほとんどが創作資料といってよい。一般市価として値がつかなかったという面もあるが、当家にとって、最後まで残しておきたかったのは先祖の手になるこのようなものであったということもできよう。結果として、これらは近世大名家の文芸創作活動の実態解明に貴重な資料となったことは僥倖と言える。

榊原家の史料類の維持に関しては、先代当主夫人の榊原喜佐子による『殿様と私』に詳しく、その苦心談は多くの大名家の子孫たちの思いを代弁している。また、藩政日記などの文書類も含めて、藩の史料の変遷は『高田藩 榊原家史料目録・研究』の「解題」に詳しく論述され、これも近世大名家の史料の明治以降現在に至る伝来の一例を示しており貴重である。

(3) 榊原家の文芸創作活動に関する先行研究の実態の調査。ここまで記してきたように、榊原家の文芸資料は昭和のはじめまでは東京の榊原当主に、昭和の大半はトランクルームに、一時、当主に戻されたがその後は徳川黎明会に、と転々とし、また榊原家の個人宅にあったがために、十全な調査がしにくかったと言える。

もっともそうであっても、まったくその存在が知られていなかったわけではない。早くには大名家の文芸研究に大きな功績を残した福井久蔵の紹介があり、また、『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー）などでも忠次・政房・政邦の項目が立てられてその簡単な紹介はなされていた。

その内でも竹下喜久男「好文大名榊原家忠次の交友」（『鷹陵史学』 $\frac{1}{2}$ ・1991年、『近世の学びと遊び』思文閣出版・2004年所収）は文芸交流の面からのものであるが、榊原家の創作活動の実態解明の先鞭をつけたものと言える。

しかし、これまでは資料調査の限界もあって、不足の面も多かったといえる。この点からも榊原家の現存資料のほとんどが上越市に集められたことは、研究の本格化にはずみをつけたものと言える。

(4) 榊原家忠次と政房の文芸交流の実態。「浄晃院様御詠草」および両者の私家集に付せられた詞書によって、かれらの文芸交流が明らかになる。その名を挙げると次のようである。

大名（含上級武家）

青山幸成（大蔵少輔、遠州掛川藩主・摂津尼崎藩主）・安藤重貞（重博、対馬守、上野高崎藩主・備中松山藩主）・池田綱政（松平、伊予守、備前岡山藩主）・石川忠総（主殿頭、豊後日田藩主・下総佐倉藩主・近江

膳所藩主)・石川昌勝(憲之、忠総孫、主殿頭、伊勢亀山藩主・山城淀藩主)・井上正利(寺社奉行、河内守、遠江横須賀藩主・常陸笠間藩主)・紀一輝(堀田、御留守役、河内守)・榊原照清(東照大権現社神主、久能奉行、越中守、榊原康政兄の清政次男)・諏訪忠晴(因幡守、信濃高島藩主)・内藤義概(藤原、風虎、左京大夫、磐城平藩主)・中川久恒(因幡守、豊後岡藩主)・中山信治(常陸水戸藩家老、備前守、常陸松岡藩主)・中山信久(勘定奉行)・細行孝(丹後守、肥後宇土藩主)・松平好房(松平忠房男)・松平忠国(丹波篠山藩主・播磨明石藩主・丹波福知山藩主・肥前島原藩主)・松平忠房(深溝、主殿頭、三河吉田藩主・三河刈谷藩主・丹波福知山藩主・肥前島原藩主)・水谷勝能(勝就、備中松山藩主弟)・水戸光圀(徳川、常陸水戸藩主)・脇坂安元(八雲軒、淡路守、伊予大洲藩主・信濃飯田藩主)

儒者・医師

荒川長好・伊庭春貞・小野(人見)友元・小野ト幽・狛高庸・坂井伯元・小島道慶・生野松寿・林鷲峰・林読耕斎・林梅洞・林羅山・人見(奈須)元格

画家

山本泰順(友我息)・山本友我

僧・神官

金剛院玄性(友我息)・立英(興山寺五世、雲堂法印)・立詮(興山寺四世)・胤海(寛永寺凌雲院)・玉舟(宗璠、大徳寺)・元良(最嶽、南禅寺、金地院)・喜見院(江戸湯島天神別当)・渡瀬久世(北野天満宮目代)

連歌師・俳諧師

斎藤徳元・里村(南)昌琢・里村(北)玄祥・里村(北)玄仲・里村(北)仍春・瀬川時春(昌佐息)・瀬川昌佐・西山宗因

榊原忠次・政房とこれらの人々との関係の構築の理由には、第一には同じ文芸愛好の嗜好を持っていた者同士が引き合うということであったとすることができるであろうし、また、領地が隣接していた、参勤交代などでの通過地であったなど、領地の位置関係、さらには姻戚関係、役職での関わりなども重要であったに違いない。ただ、交流の緊密さを考えると、単に愛好者同士、姻戚関係だけによって、このような関係が築けたとは思われない。物理的な要因、つまり、近在に住んでいたということも重要な要因になったに違いない。考慮すべきは各大名の江戸屋敷での交流で、この見方は近世文芸のあり方の解明に重要な視点を与えてくれると思われるのである。

大名ではないが、特に重要であったのは林家で、その林家は当時の文芸・学問愛好大名を取り持つ役割を果たした。地域的な面という林家の別邸であり国史館のあった不忍池の畔が当時の上級階層の文芸の中心地を

なしたと言えるのである。不忍池の対岸にあった榊原家は勿論、その他の大名家の屋敷との近隣関係は近世初期の上層階級の文芸の活発さを保証したものと言える。

(5) 政邦の和歌の特徴。政邦には『千流一滴集』という生涯に渡っての和歌を集めた膨大な家集がある。この家集にも詞書が多く付されており、忠次・政房の後の時代の大名家の文芸交流の実態を知らしめてくれる。その和歌には近世歌人としての特徴が見えるが、領地であった村上(越後)関係の和歌が散見されることも注目すべきである。また、忠次や政房の領地であり、榊原家にとって忘れることのできない姫路の地を思う和歌も残されており、このような父祖伝来の本領地とも言える土地への思いの吐露は近世大名の精神をかいま見せてくれるものであろう。

政邦が村上藩主であった時代は『奥の細道』で芭蕉が村上を通過した時と重なる。当時、政邦は在京中であったが、家臣の中には芭蕉と関わりを持った者もいた。この点も政邦の文芸を考察する上で忘れてはならないことである。

(6) 榊原家史料中の和漢聯句について。榊原家の文芸資料には和歌だけでなく、連歌・俳諧・和漢聯句なども含まれており、広範な創作活動が行われた様相が分かる。

現存する和漢聯句は10巻で、9巻は未発表である。この内、福知山藩主の松平忠房の主催した和漢聯句を見てみると、忠房およびその一族が一順した後に、忠次らが後を付けて完成している。その連衆は、忠次以外、政房、林家一族、その門下、連歌師である。この作品は現在、松平文庫にもあり、両者には異同も散見する。この相違で注目すべきは松平家本での作者名の表記で、中でも忠次を「素浩」、政房を「弄吟」として雅号としていたことは注目に値する。これは松平家本が清書懐紙で、この作品が松平忠房家のために興行されたことを示しているであろう。

(7) 西山宗因の連歌、俳諧について。榊原家には連歌、俳諧の作品も残されている。その内で文学史上重要なものは宗因の関わる連歌、俳諧であろう。宗因が忠次時代に姫路まで赴いて、そこで忠次らと連歌を巻いた。この事実は宗因の事跡の確認として重要である。また、両者の関係の深さを示すものとして、宗因発句の「歳旦書付」二点(連歌一点、俳諧一点)が現存する。これの二点は宗因真跡を思われ、これらが榊原家に残されていることは近世文芸および歳旦という形態の意味の再考に貴重な資料となっている。

さらに榊原家にはもう一点連歌歳旦が残されており、これは里村家関係のものであるが、これも宗因の真跡と思われる。三点すべて寛文二年のものと考えられるが、宗因がみずから発句を詠んだ歳旦、しかも連歌と俳

譜の両形態のもの、さらに自分の加わらない里村家の歳旦をわざわざ書写して、大坂から姫路の榊原家へ贈ったという事柄は、近世初期の歳旦という文芸のあり方、恐らくは、文芸愛好者への新年の挨拶として歳旦というものがふさわしいものであったことが、すでに寛文期には共通の理解であったことを示すのであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

廣木一人 榊原忠次・政房の池之端屋敷 - 林家・脇坂安元・松平忠房などとの文学交流の場、和歌文学研究、査読無、114、2017、pp7-12

尾崎千佳、西山宗因の俳業、ことばの魔術師西鶴 - 矢数俳諧再考、査読無、2016、pp69-98

尾崎千佳、歳旦書付から歳旦帖へ - 近世初期の歳旦をめぐる、俳文学報、査読無、18、2014、pp39-53

〔学会発表〕(計6件)

廣木一人、榊原忠次・政房の池之端屋敷 - 林家・脇坂安元・松平忠房などとの文学交流の場、和歌文学会、2016年10月8日、東京大学(東京都・文京区)

廣木一人、榊原家文芸資料の全体像、フォーラム「榊原家の文芸」、和親会、2015年11月22日、上越市高陽荘(新潟県・高田市)

山本啓介、『おくの細道』の越後と政邦公、フォーラム「榊原家の文芸」、和親会、2015年11月22日、上越市高陽荘(新潟県・高田市)

廣木一人 山本啓介 玉城司 堀川貴司、榊原家文芸資料の特徴・価値と近世大名家の文芸、フォーラム「榊原家の文芸」、和親会、2015年11月22日、上越市高陽荘(新潟県・高田市)

廣木一人、大名・榊原家の文芸 越後高田藩史料の調査から、俳文学会東京例会、2014年12月14日、聖心女子大学(東京都・渋谷区)

尾崎千佳、榊原忠次・政房と西山宗因、俳文学会東京例会、2014年12月14日、聖心女子大学(東京都・渋谷区)

〔図書〕(計3件)

廣木一人 玉城司 深澤真二 堀河貴司 尾崎千佳 山本啓介、私家版、榊原家の文芸・忠次・政房・政邦、2017、748

廣木一人 玉城司 深澤真二 堀河貴司 尾崎千佳 山本啓介、私家版、榊原三代集、2016、220

廣木一人 玉城司 深澤真二 堀河貴司 尾崎千佳 山本啓介、私家版、浄晃院様御詠草、2015、151

6. 研究組織

(1)研究代表者

廣木 一人 (HIROKI, Kazuhito)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：30228829

(2)研究分担者

堀河 貴司 (HORIKAWA, Takashi)

慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・教授

研究者番号：20229230

(3)研究分担者

玉城 司 (TAMAKI, Tukasa)

清泉女学院大学・人間学部・教授

研究者番号：20410441

(4)研究分担者

尾崎 千佳 (OZAKI, Chika)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50335759

(5)研究分担者

山本 啓介 (YAMAMOTO, Keisuke)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：50601837

(6)研究分担者

深澤 真二 (HUKAZAWA, Shinji)

和光大学・表現学部・教授

研究者番号：80218875